



雑  
13  
三

71  
431  
3



門 辨  
 號 431  
 卷 3



花 紅 糸 都 噺 卷 下

一 上 様 方 儀 の 所 産 所 兼 武 藏 方 儀 所 産 所 也  
 一 署 右 上 儀 上 的 鑑 示 出 之 儀 以 署 以  
 一 又 後 二 月 十 旬 建 仁 寺 之 日 以 教 石 の 粥 以  
 一 又 後 三 月 十 旬 餘 一 月 餘 の 日 以 是 を 徳 人 示 施 一  
 一 又 是 日 以 飢 かつ 飢 凌 ぐ 事 の 殊 方 と 以 入  
 一 又 是 日 以 上 仁 惠 示 施 下 也 又 以 寺  
 一 徳 小 化 一 大 坂 之 始 迎 玉 の 豪 富 の 事 の 我 也 以 一  
 一 施 示 示 一 一 々 々 一 窮 人 の 事 の 卷 七 終 也

東京生高六公保  
 餘丁町百拾肆番地

明治二十六年十一月五日  
 坪内雄蔵氏寄贈

下出卷下

ト

毎くくは嘗て有難た仁恵るごとく  
 一それば災後京北の老たも多きとぶれごとく  
 親族朋友との不焼失せしむれりつと法  
 さんもろく各々松根せしむるも亦ひるるに  
 東方より火拂くく日月の光をかんるごとく  
 所仁政されば所交配の所方とくも亦く神め  
 の宰りよくすし尚ほ改道正しく一言世不廢ふ  
 それば犯人と交ひのやうに事因循の改りよ  
 過つては罪の軽重を分ち理非めくらくに

仁慈然に候くくされば京北の老くも亦く恩よ  
 かくりく出時の難儀も亦くが如くも亦有  
 難た所觸目く作出されれば各々京北の老ひ  
 とすし一皆難と事小是くぬ又亦持の所人等  
 他處にゆるの孤株ふしあひし亦亦普徳考る持  
 以舟に建べし抱を爰借を所持のものも亦  
 抱を爰の分たふく建べし一亦く亦亦情も亦  
 かくたりの七老ふく一亦く一或く道があらひ乃  
 小登くくも亦のらひ亦亦事分くげじ一又

仲るるものごとく御免作任付し是を若くは兼業  
 と考へにさるるに成る程に上意あり大工日雇  
 とも御免程平日の通りよりさる程にむこがけま  
 したる中後さる若くは銀と金たる要否所へ出  
 づし又徳正材木伐出の後の京都さ  
 づくさる程の勿痛き價に高入やうだん  
 任せさるる又米穀放本を外何よりは賞へしめ  
 する價ふしと一りのへ子建所へ出づしと又所  
 のの是とのめく上下是利と及ぶ毎くは

火災の後の後々いふ御織袴等も亦おきた若  
 とも石の石の後の後々いふ御織袴等も亦おきた若  
 ようく人心味のごとくは出所今銀も出  
 たらりののの若くは出づし或はあやした小  
 かと程ひ兼業なと下り付小ぞ後小廿余日  
 成らばつおを辺の飛所通へしとく万平平  
 目小後にはさるるに善信始り是ふよりの  
 人心自然と定まり京地大よ縁際し非道  
 の若くは銀と志しは改め公命と奉んお意



一時の雀士とありぬとされば一あるを評す小沢  
 氏の衆人ともいふ東山老の精舎に仮居し  
 わりしと彼道人のありたりたる衆人  
 その衆にありとさる程に乃人いづくふ人  
 さけあつたわと同たれば乃人笑く衆人  
 とさく圓の東山とて教さしとが思はれ  
 骨はぬんが衆あつたりの衆凡のまよ衆と  
 深き弾とありぬらる衆の衆とて  
 衆入洛とて入りしとて湖中の風を吹

衆一と今ゆり衆とて評す  
 とわまの衆君子ともいふとされば昔の名譽  
 和氣何茶が衆は珍しく地衆はあり衆  
 先牛の衆の光とて大光の衆あるの衆  
 衆は老人のありとて斜抱衆は弾一腔 高山  
 流水意深く 怪来餘韻血亮響世夜祝融仇帝衆  
 意又と衆衆とて面白く又洛東の衆衆も  
 正月廿九日明初とて是も又衆の衆衆示  
 一衆人の衆人とてされば衆もいふとて

鐵と化し金とさるは易く人の遠心と除  
 布とさるは易く人の遠心と除  
 一のひいから民は樂に誇り永く泰平此厚  
 録と身んごりうの驕奢の風玉くに増も一錦  
 繡を載して衣被を粧ひ珠玉を飾りて家  
 室を粧う世の放室これがくあふ泥土とさるるの  
 ごとくかうくは況んや京師の風俗美は  
 ちりりして其亮る劫と志くは民族大賈  
 へいもさるるり空乏の若尚是小然優

んのひい得るこれば是速多ぬく明悟の人あり  
 く浮樸の表示をやどこはとらんも一濁の  
 水はゆく一車薪の火を移るごとくさるる  
 空しく灰塵とさるる時うるは空夫人今や  
 聖君賢佐とあつては清けいひ徳の四海  
 化し仁恵死骨に及ぶこれだけ交のやせ世  
 の汚濁は一愛し乾坤をわくわく驕奢者  
 の浮華を拂ひ徳外の風を起しあふと  
 有るくも目やうくさるるをさるる

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

天明きる雲一初春未泮天後徳名家  
此禱歌人曰不捨矣次子多あゝと急ぐ  
未だ其作者を詳しむるも其傳言  
あり今其内教を考へて尾少記し  
其より其光景を考へて其證を考へ  
たれ其禱歌を考へて其少記を考へ

洛陽

行

舞名氏

戊申正月晦日曉

焼出洛東描辻子



杜頭僅殘蛭子杜  
 寺前回祿建仁寺  
 青樓簾燃為紅樓  
 白人顏燻成黑人  
 整々火消行粧者  
 忠臣藏之画看帝  
 點々鐘鼓音声者  
 唐綸帳之急逃行  
 焰飛河西支市中  
 寺御幸麩屋富揚  
 衣新釜及西小川  
 越堀河至千本防  
 上自一条今出河  
 下過五条橋詰塘  
 四面八方煙簇々  
 千門萬戶炎昭々  
 本原通為炯通理  
 醒井筋何不能消

染殿地藏地為席  
 五条天神天作梯  
 天神火粉如鋪錦  
 藥師燒斃似煮蛸  
 東燒西殘本願寺  
 上炎下免茶人房  
 个丸不止管大臣  
 醫王無効因幡堂  
 无恙為原野中鳴  
 右習桶取至失桶  
 火花雪散俊成社  
 心當夫見夕顏墳  
 本國塔婆五層覆  
 池坊本堂六角焚  
 銅駝坊中萬民驚  
 聚樂高趾千軒薰  
 行願寺僧皆着革  
 道成鈎鐘再成湯

水火相攻水火共責  
妙覺角龍吟起雨  
戾橋燒落木勢戾  
赫々赤者踏火燃  
抱兒夫婦河原泣  
算司長持及鍋釜  
往來連綿難押分  
伏見男女伏不寢  
革靴鳴燭洛中乏

今日菴今日燒亡  
報息鳴虎嘯助颺  
西陳些些殘人尽西  
皎々白者殘土藏  
失親兄弟菜菔狂  
弓鎗木小与錢箱  
人馬絡繹欲蹈鳩  
大津老少大斷腸  
豆腐葯蕩平安衰

勿憂御藏一不燼  
僉今物種喰付生  
右狂躰為記事錄而已  
天會何盡天明春

諸名家詩歌

次韻森氏京火之作 清人 蘓元端

祝融行令驅風車  
災却長安十萬家  
偌大詩腸幸不燼  
吟遊依舊弄春花

京火記事

草廬

東門災厄及池鱗  
宮闕化煙花  
作塵應是

皇天改舊政，降斯凶虐，革斯民。

災後之作

荆山

帝闕化塵，後我徒未定居，只携三尺劍，无復一篇書。卽老時，供食山僧或，与蔬石花，昂投宿，何必擇親疎。

災後口占

道堅

忽配河東竈，突難騰々，火焰如流丸，四隣何救。燃眉急，羣支只知破膽寒，携幼躑々扶老病，忍飢咄々報平安。丈夫不厭无家。

宅赤裸空拳天地寬

為海小

海月

免の力、とと、  
あかしく世は

御不慮乃、  
菅原

今朝足、  
玉志、

河、  
み、

何れも人昔紙をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

此のれくまふ

高平

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

のかまふ

一室

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

ら

菅原

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

葛城

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

何れくまふ物をえん袖わけて見しと友なる  
物れくまふ

書札調法記

高橋

陽を來てきしと文山抄の如く印極ふる  
されしとて

弟後長未も此書調法を  
公美

さしきと立おれ後世とて日あけ  
其のよき春ある

淺沼年々  
自文

美ふと京淺沼は花抄の如く  
以て

芸香堂假名物藏板目録

京堀川高辻上町

梶川七郎兵衛

才体柱立

けまの町人孝女のめととら糸肉よくなり後世  
らりくとて死やとく一切の病の縁きりぬとる  
妙術とあるなり 全アを冊

後世行要記

けまの天下玉家神仏の神聖なることこれなり  
法人未くと世に伝へるべきこととてけしきりぬと  
ある一世人の心よりのあるなり 全アを冊

病家心得草

けまの常々養生の心得あり病入りの心得あり  
づきりぬとて死やとく一切の病の縁きりぬとる  
合ふこととてあり一世人の心よりのあるなり 全ア二冊

方角

日用辨惑書

けまの家がし方角吉山合神のめととら糸肉よくなり  
二の毎日の吉山合神の法ふたれ日ちこ三ヶ月を  
あかすかきむ方角あり一又方遠未をかぬとる  
づきりぬとてあり一世人の心よりのあるなり 全 三冊

吉凶

書札調法記

文章の習へ字をぬくこととて外状の封し  
二の他又木の根中よりか細法ののりもくり  
あきのせし日利細法ののりなり 今ア三冊

花柳葉部

けまの天明八年申の正月晦日京都大火災のりぬく  
しとてあかす又藤原河内守のりぬくこととてあかす  
あつたをかきりぬの奇候もあつたなり 今ア二冊

万寶秘事記

貝不篤信著  
日用之法のうけと成り  
全 二冊

北畠物語

勢陽軍記と云々 全  
北畠家の始末と成り 七冊

石見國孝子傳

石加守孫村八郎著  
孝子の徳のうけと成り  
全 一冊

駿河の行状書

駿河の八幡孝子  
の徳のうけと成り  
全 一冊

馬療治調法記

馬のつとめしそか入  
まの茶法をうけと成り  
全 一冊

牛療治調法記

牛のつとめしそか入  
まの茶法をうけと成り  
全 一冊

馬療撮要

馬療治を法記のうけと成り  
ひつとめしそか入  
全 一冊

牛科撮要

牛療治を法記のうけと成り  
ひつとめしそか入  
全 一冊

集候和書

徳候了本著  
ひつとめしそか入  
全部十六冊

寺子調法記

実治政寺子成り今川  
高安集をうけと成り  
ひつとめしそか入  
全 一冊

吾道大師行状記

尾別筆山和尚著  
ひつとめしそか入  
全部二冊

大光普照集

八事山和尚著  
ひつとめしそか入  
全部三冊

尾別八事山諦忍和尚著速書  
品々有別目録アリ

正信偈繪抄

正信偈の繪之のうけと成り  
ひつとめしそか入  
全部二冊

仔細系宮細目全

仔細系系えの乃のりだらん  
大坂の法をうけと成り  
ひつとめしそか入  
全部二冊

唐士奇談

全部五冊 繪入

けいの中華の康熙六年の  
又のその後刻の  
日本のはじめの  
西方の文化の発展  
わが国と云々

天明八年 戊申孟冬

江戸書肆

日本橋室町三丁目

須原屋市兵衛

大坂書林

心齋橋筋北太即町北江入

河内屋喜兵衛

京都書房

西堀川高辻上町

梶川七郎兵衛

七村性  
三冊内